



## 小論文

コース	ページ	解答用紙枚数	時間
教育実践コース 心理学・幼児教育コース 人文科学コース	1~5	1枚	120分
特別支援・生活科学コース	6~14	1枚	120分

## 学力検査

コース	教科	試験科目	ページ	解答用紙枚数	時間
人文科学コース	英語	コミュニケーション英語Ⅰ・ コミュニケーション英語Ⅱ・ コミュニケーション英語Ⅲ・ 英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ	15~22	4枚	120分
数理自然科学コース	数学	数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・B	23~27	5枚	120分
人文科学コース	国語	国語総合・現代文B・古典B	28~38	3枚	120分

(38ページから逆に一~十一)

### 注意事項

- 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけない。
- この問題冊子は38ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には、監督者に申し出ること。
- 解答はそれぞれ指定の解答用紙に横書きで記入すること(国語は除く)。
- 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
- 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
- 解答用紙は持ち帰らないこと。

## 教育実践コース、心理学・幼児教育コース、人文科学コース

- (注意)   ・解答は横書きとし、行数および字数は指定を超えないこと。  
           ・解答用紙は1行が20字で、全部で1200字(60行)となっている。  
           ・解答の際には、句読点、引用符、括弧などは、いずれも一字に数える。ただし、行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

日本の将来人口に関する以下の問いに答えなさい。なお、表中の元号表記は原典のままである。

問 1 表1～3は、それぞれ日本の将来推計人口を示したものである。表1～3から読み取れることを、それぞれ100字以内で述べなさい。

問 2 表4～6は、日本の年齢別将来人口の推計を都道府県別に示したもの一部である。表1～3と合わせて、総合的に読み取れることを300字以内で述べなさい。なお、これにあたっては、あなたが重要だと思う表を2つ以上適切に組み合わせて論を構成すること。ただし、表をすべて使う必要はない。

問 3 問1・問2を踏まえて、あなたが考える目指すべき日本社会の姿、その社会を目指すべき理由、その社会を実現する手段、を合わせて600字以内で述べなさい。

表1 年齢区分別将来推計人口

単位：千人

	2010年	2015年	2020年	2030年	2040年	2050年	2060年
総人口	128,057	126,597	124,100	116,618	107,276	97,076	86,737
0～14歳	16,803	15,827	14,568	12,039	10,732	9,387	7,912
15～59歳	70,995	68,342	66,071	59,498	50,079	43,924	38,479
60～64歳	10,037	8,476	7,337	8,231	7,787	6,089	5,704
65～69歳	8,210	9,715	8,155	7,355	8,865	6,627	5,623
70～74歳	6,963	7,779	9,179	6,711	7,584	7,202	5,656
75歳以上	14,072	16,458	18,790	22,784	22,230	23,846	23,362

資料：2010年は総務省「国勢調査」、2015年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果

(原注)2010年の総数は年齢不詳を含む。

(引用者注)①2010年の数値は実績値、2015年以降の数値は推計値である。

(引用者注)②出生中位（死亡中位）推計とは？ 人口の将来推計は、将来の出生数、死亡数などを推計することで得られます。出生数を推計するためには、将来における女子の出生率が必要となります。出生率及び死亡率の将来については不確定要素が大きいため、幾つかの仮定を設け、それぞれ3つの値が、合計で  $3 \times 3 = 9$ 通りの値が推計されています。これらをそれぞれ中位推計、高位推計、低位推計と呼びます。上記で紹介した推計値は、出生率、死亡率共に中位推計した場合の推計値です。（表記は引用元のまま）

出典：表は内閣府Webページによる。

([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/s1\\_1\\_02.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/s1_1_02.html))

引用者注②は総務省Webページによる。

(<https://www.stat.go.jp/koukou/cases/cat1/fact1.html>)

表2 全国の総人口に占める各地域ブロックの総人口の割合

(%)

ブロック	平成 27 年 (2015)	平成 32 年 (2020)	平成 37 年 (2025)	平成 42 年 (2030)	平成 47 年 (2035)	平成 52 年 (2040)	平成 57 年 (2045)
北海道	4.2	4.2	4.1	4.0	3.9	3.9	3.8
東北	7.1	6.9	6.7	6.5	6.3	6.1	5.8
関東	33.8	34.4	34.9	35.4	35.8	36.4	36.9
北関東	5.4	5.3	5.3	5.2	5.2	5.1	5.0
南関東	28.4	29.0	29.6	30.1	30.7	31.3	31.9
中部	16.9	16.8	16.8	16.7	16.7	16.7	16.6
近畿	17.7	17.7	17.6	17.5	17.4	17.3	17.3
中国	5.9	5.8	5.8	5.7	5.7	5.7	5.7
四国	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.7	2.7
九州・沖縄	11.4	11.3	11.3	11.3	11.3	11.3	11.3

## 地域区分

北海道：北海道

東北：青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

北関東：茨城県、栃木県、群馬県

南関東：埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県

中部：新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県

近畿：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山县

中国：鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国：徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九州・沖縄：福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

出典：国立社会保障・人口問題研究所(2018)：「日本の地域別将来推計人口—平成 27 (2015)～57(2045) 年—平成 30 年推計」

表3 平成 27(2015)年の総人口を 100 としたときの指標でみた総人口

順位	平成 42 年 (2030)		平成 57 年 (2045)	
	全国	93.7	全国	83.7
1	東京都	102.7	東京都	100.7
2	沖縄県	102.5	沖縄県	99.6
3	愛知県	98.3	愛知県	92.2
4	神奈川県	97.9	神奈川県	91.1
5	埼玉県	97.4	埼玉県	89.8
:	:	:	:	:
43	福島県	85.4	福島県	68.7
44	山形県	85.2	高知県	68.4
45	高知県	84.4	山形県	68.4
46	青森県	82.3	青森県	63.0
47	秋田県	79.6	秋田県	58.8

出典：表2と同じ。

表4 0—14歳人口の割合

(%)

順位	平成27年 (2015)		平成42年 (2030)		平成57年 (2045)	
	全国	12.5	全国	11.1	全国	10.7
1	沖縄県	17.3	沖縄県	16.0	沖縄県	15.3
2	滋賀県	14.5	滋賀県	12.9	熊本県	12.6
3	佐賀県	14.0	佐賀県	12.9	滋賀県	12.5
4	愛知県	13.7	熊本県	12.8	佐賀県	12.5
5	宮崎県	13.6	宮崎県	12.5	広島県	12.0
:	:	:	:	:	:	:
43	高知県	11.5	高知県	10.1	岩手県	9.2
44	青森県	11.4	福島県	10.1	福島県	9.2
45	北海道	11.3	北海道	9.7	北海道	9.0
46	東京都	11.3	青森県	9.3	青森県	8.2
47	秋田県	10.4	秋田県	8.5	秋田県	7.4

出典：表2と同じ。

表5 15—64歳人口の割合

(%)

順位	平成27年 (2015)		平成42年 (2030)		平成57年 (2045)	
	全国	60.8	全国	57.7	全国	52.5
1	東京都	66.0	東京都	64.7	東京都	59.0
2	神奈川県	63.6	神奈川県	60.8	愛知県	55.1
3	沖縄県	63.0	愛知県	60.6	神奈川県	54.1
4	埼玉県	62.6	大阪府	59.7	埼玉県	53.5
5	愛知県	62.5	埼玉県	59.6	沖縄県	53.3
:	:	:	:	:	:	:
43	宮崎県	56.9	長崎県	51.8	山形県	47.4
44	山口県	55.8	青森県	51.6	山梨県	47.2
45	秋田県	55.8	宮崎県	51.2	福島県	46.6
46	高知県	55.6	鹿児島県	50.8	青森県	45.0
47	島根県	55.1	秋田県	48.5	秋田県	42.5

出典：表2と同じ。

表6 65歳以上人口の割合

(%)

順位	平成27年 (2015)		平成42年 (2030)		平成57年 (2045)	
	全国	26.6	全国	31.2	全国	36.8
1	秋田県	33.8	秋田県	43.0	秋田県	50.1
2	高知県	32.9	青森県	39.1	青森県	46.8
3	島根県	32.5	高知県	37.9	福島県	44.2
4	山口県	32.1	山形県	37.6	岩手県	43.2
5	徳島県	31.0	福島県	37.5	山形県	43.0
:	:	:	:	:	:	:
43	滋賀県	24.2	滋賀県	28.7	福岡県	35.2
44	神奈川県	23.9	神奈川県	28.3	滋賀県	34.3
45	愛知県	23.8	愛知県	27.3	愛知県	33.1
46	東京都	22.7	沖縄県	26.2	沖縄県	31.4
47	沖縄県	19.7	東京都	24.7	東京都	30.7

出典：表2と同じ。

## 特別支援・生活科学コース

- (注意)   ・解答は指定された解答欄に横書きで記入し、字数は指定を超えないこと。
- ・解答用紙は1行が20字で、全部で1200字(60行)となっている。
  - ・解答の際、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字に数え、算用数字およびアルファベットは1マス2字としてもよい。ただし、行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

次ページ以下の＜資料＞は、新谷和代著『地域活動のススメ　すべての世代がひとつになれる、とっておきの方法』(幻冬舎ルネッサンス新書、2019年)の一部である(ただし、出題にあたり原文の一部を変えている)。

次の問1から問3に答えなさい。

問1 下線部①とはどのようなことか、300字以内で要約しなさい。

問2 下線部②に対する著者の考え方を、300字以内で説明しなさい。

問3 下線部③について、資料を参考にしながら自分の体験を踏まえて、あなたの考えを600字以内で記述しなさい。

## ＜資料＞

### ネットに囮まれた私たちの生活—コミュニケーションとネット環境

いわゆる人は、相互に協力しあいながら集団生活を営む生き物であり、他者と体を張って戦い縄張りを争うよりも、お互いの違いを自分にはないものとして認め合うことで、地球上のどの生き物よりも進化を遂げてきた。そして、そのような豊かな人の社会生活を成り立たせているのは、高度でバリエーションも豊富な他者とのコミュニケーションであり、情報を交換したり、協力し合ったりする際には欠かせない。

近年、この他者とのコミュニケーションは、その人と会ったり話したりして行う直接のコミュニケーションよりも、文字や画像をやり取りして間接的に行うネットのコミュニケーションが増えてきている。ネットは場所も時間も選ばないので、何かを伝えたい時にはすぐに連絡して気軽にやりとりをすることができる。またネットを使う主な機器としてのスマートフォンは、小中学生は全体の3分の2、高校生ではほぼ全員が所持しており(内閣府, 2018)、大人から子どもまで幅広い年代の人々が日常的にネットを使う世の中となった。このようにネットは、情報検索、ゲーム、音楽や映像配信など、気晴らしや娯楽としては最良のツールであり、私たちを瞬く間に遠くの見知らぬ人や、まだ見ぬ世界の情報とつなげ、その人と会話をしたり、遊んだり、情報を取り入れさせてくれる。そうやって私たちは、ネットを通して自分とは異なる価値観に出会い、新しい生き方を学ぶきっかけにもなっている。

しかし、このように、私たちの生活に恩恵をもたらしているネットは、困った面も持ち合わせている。例えば知らず知らずのうちに集団心理が働いて、他者に流されやすいのもネットの特徴である。社会心理学で言うところの「傍観者効果」が働き、「誰かがするだろう」と誰も反応しなかったり、逆に気持ちが相互に高まり合って、過剰に反応してしまう可能性がある。ネットの中で起こる軋轢や衝突、フェイクニュース、そしていじめは、人を苦しめたり人を経済的に困窮させたりして、心の病に陥れたり犯罪に手を染めさせてしまうことさえもある。よくよく履歴をたどっていけば、何が本当で何が矛盾点なのかを見つけることができるはずであるが、ネットは大量の情報を一度にそれも迅速に次々に流していくので、情報の渦に巻き込まれると後戻りをすることが難しく、結局情報に流されるままになってしまうことがある。また、

うっかり相手からの問い合わせに返事をせず、情報の波に乗り遅れようものなら、いわゆるネット住民から「ノリの悪い人」として非難され、最も厄介なことには非難が非難を呼び、いわゆる「炎上」の対象となってしまうこともある。

そのような面倒なことが多いならば、いっそすべてのネット環境から遠ざかってしまえばよいとも考えられるが、昨今ではそれがなかなか困難である。というのは、ネットによるコミュニケーションは子どもから大人にまで深く浸透しており、それを避けて生活することは、日常生活における他者とのコミュニケーションのレベルの低下を意味し、場合によってはコミュニケーションの断絶にもなりかねないからである。つまり、ネットでのコミュニケーションは、円滑に行われればその恩恵に浴することができるが、うっかり使い方を間違えてしまえば、他者を傷つけたり逆に傷つけられたりして自身が深いダメージを受けるリスクもある、諸刃の剣のようなものである。

#### 「直接的なコミュニケーション」体験の必要性とその驚くべき詳細

私たちは大人になればたいていは、まずはまずのレベルでコミュニケーションを行えるようになっている。では、どの機会によりそのスキルを学んでいるのだろうか。それはやはり、人は昔からそうであるように、他者と直接会って行うコミュニケーションの経験に勝るものはないと考えられる。表情や声、身振り手振りを複雑に使った直接のコミュニケーションのインパクトや情報量の影響力は、どんなにネットでのコミュニケーションが文字や絵文字、スタンプ、映像などを豊富に使って行われようとも、それを上回ることができない。逆に言えば、そのように豊富な情報量を他者に与えるネットのコミュニケーションは、単純で扱いが簡単であることも持ち合わせているがゆえに、前述したように時として誤解を受けたり、集団を思わぬ方向に導くことにもなりやすいのである。

しかし、そのように伝わる内容が質量ともに豊かである直接のコミュニケーションは、複雑であるがゆえに、自分が相手に向かって表現したことを相手がどう受け止めるか、また相手から自分に表現されることを自分はどう受け止め解釈するかについて、小さな決定と小さな検証が時間の流れの中で連続して発生し、さらに相手も自分と同じことをしているわけで、そのような相互作用の面からも、人はコミュニケ

ションの能力において、つくづく高度な進化を遂げてきたものだと思われる。例えば、日常のコミュニケーションでは、まずコミュニケーションを開始するにあたり、相手がどのような独自の考えを持っているのか、自分と共通する考えはどの部分なのか、今は自分と同じよい気分でコミュニケーションを始めようとしているのか、何を到達点と考えながら話を進めていくかなどについて、とりあえず見定めが必要である。そして、コミュニケーションが開始され、相手と同じ空間や時間の中でやり取りをしていき、相手についての情報量がだんだんと増えていく中で、自分が最初に持っていた相手に対する仮説的な考えに対する検証が行われる。そして、その検証結果に応じて、自分の言葉の内容や伝え方が変化していく。つまり、直接のコミュニケーションは、始まりはだいたいが不明だったりする相手の気持ちを、言葉の内容や、身振り手振り、声の高低やスピード、目の開き具合や瞳の動き、口元の上がり具合、顔色や顔の傾け方、立ち方や座り方などを観察しながら必要な情報を取り込んだり、自分でも発言したりしながら、それらの行為の反応を記憶にとどめながら変化を追い、お互いが行き着く結論や終結がどこなのかを、お互いが探りながら進めていくものであると思われる。また、年齢や立場、同性か異性かにより敬語や丁寧語の使い分けが加わることもある。

以上のコミュニケーションの手続きを考えると、「人とのコミュニケーションが苦手」と思う人は、やはり直接会って人と話すことは面倒だし、とても自分にできるとは思えない、ネットの方が気軽だと考えてしまうかもしれないだろう。しかし、実は人は、コミュニケーションの流れの中で、以上の項目を逐一頭で考え、自分の行動を意図的に操作しながらコミュニケーションを進めているわけではなく、上記の手続きのかなりの部分を省きながら、コミュニケーションを行っていると考えられるのである。そうでなければ、このような複雑な検証やそれに対する行動の変化は、コミュニケーションのリズムや流れを逆に阻害してしまうであろう。コミュニケーションには、そのようなよい気分や心地よい調子が順調に流れていることが大切であり、それにより相手との一体感が感じられることで、さらにコミュニケーションが深まっていくのである。

では、その省略は、どのように行われているのであろうか。それにはまず人は、  
②「たいていは、他者は良い人である」「たいていは自分の意見を遠慮なく言っても、受

け止めてもらえる」という「信頼感」を持っていることが大切なのである。このような信頼の下で行われるコミュニケーションでは、「お互いの意見の丁寧な確認は必要ないよね」という了解の下、会話の省略がテンポよく行われたり、逆にあえてゆっくりと念押しの確認をして他者と一体感を感じたりしながら、コミュニケーションが順調に進められていく。また、コミュニケーションの中では小さな食い違いや誤解は付き物であるが、しっかりした信頼関係の中で行われるコミュニケーションでは、それを思い切って弁明し、許し合うことができる。ここで、「思い切って」と述べた弁明の関係修復作業は、円滑なコミュニケーションにとって非常に大切なところである。つまり、その修正希望には、「私の弁明のために、あなたとの貴重なお時間を割いてしまってすみません。でも、あなたとの信頼関係を一点も曇らせたくないのです。その私の気持ちをどうか受け取ってください」というメッセージが含まれており、それを許す側との間に、更なる信頼関係が結ばれることがある。そのようなコミュニケーションの細かい修復作業や確認作業と、逆に省略してよいところがやり取りの中でうまくはまっていくと、コミュニケーションは心地よい体験となり、終結も納得のいくものとなる。こうやって書き記してみると、我々は普段、かなりややこしい形のコミュニケーションを暗黙の裡にわりと平気で行っていることがわかる。

### コミュニケーションスキルの習得は乳児期から始まっている

さて、以上のように、コミュニケーションのスキルは、私たちの生活を豊かにしてくれる欠かせないものであるが、そのようなスキルの習得は、小さな赤ちゃんの頃からのコミュニケーションの積み重ねから始まっていると思われる。

まず、乳児期の赤ちゃんには既に、授乳時やあやしかけなど、コミュニケーションの原型とも思われる、養育者との間にゆっくりとした、一定のリズムを保つシンプルな関わり合いが生じている。そして生後3カ月も過ぎると、そのような関わり合いは、赤ちゃんからも積極的に開始されるようになる。例えば、親が赤ちゃんのほほをつついた時に赤ちゃんがニッと笑うと、親は嬉しくなってまたほほをつつく。そうすると赤ちゃんがまたニッと笑う。親がやめようとすると、赤ちゃんが催促するように声を出す。親はその声に反応し、またほほをつつく。すると赤ちゃんは大きな声で笑い、親が自分の要求に応じてくれたことに、形を変えて「返礼」する。そして、そう

といった赤ちゃんからの返礼に親の方も気がつき、「気づいていますよ。ありがとうございます」という気持ちを込めて、更に笑顔を投げかけるという具合である。このように親も赤ちゃんもりズムあるやり取りを、お互いに少し調子を上げたり戻したり、呈示の仕方を変化させたりしながら繰り返していく、その時間を楽しみながらコミュニケーションを続けていく。精神科医スターントン(Stern, D. N. 1989)は、このようなコミュニケーションを「情動調律」という言葉で表現しているが、そういう一連のやり取りが、赤ちゃんの心の中に、おぼろげながらの人に対する「信頼関係」となって、その後の発達を支えていくと言われている。この親と赤ちゃんとの信頼関係を、発達心理学者エリクソン(Erikson, E. H. 1959)は、「基本的信頼関係」と呼んで注目したが、精神医学者ボウルビィ(Bowlby, J. 1979(原著))は、親のこのような応答性は、赤ちゃんの親に対する愛着行動を促進し、子どもは「安全基地」である親を出発点として、背後に「見守ってくれる親」の存在を感じながら、思い切って外の世界に冒険に出かけていくことができると言っている。

そのような信頼関係や安心感は、幼児期になると更に子どもを支え、他者が自分の要求を満たしてくれる存在であると共に、他者を自分の鏡として捉え、他者の楽しみのために自分が行動する能力を持っていることもイメージできるようになる。つまり、他者の楽しみと自分の楽しみが共通であると感じる一体感により、集団としてのごっこ遊びや冒険ごっこなどが活発に行われるのである。それは、自分が心に描いているイメージと同じ遊びをする仲間にわかりやすく言葉で伝えることができるようになったり、仲間は何を考えているのかを想像する能力が磨かれていくことと関係する。もちろん、お互いの意図がぶつかり合ってけんかになることもあるけれども、たいていはごっこ遊びの想像性や創造性は最大限に發揮され、親密な他者を相手として、十分な時間をかけた様々な遊びが体験として繰り返されることにより、ゆっくりと着実に、子どもたちの中にコミュニケーションの力が発達していくことが想像できる。

思春期以降に高められたコミュニケーションスキルはその後の人生を豊かにしていくさて、小学校入学後の児童期以降のコミュニケーションは、小学校中学年までは自己中心的で幼い行動も見られる一方、「みんなで仲良くする」ことがクラスの雰囲気を

律している。また、親や先生からの指示という外的な基準に、「そうあるべき」と迷うことなく行動しようとする。しかし、高学年から中学1年生にかけての思春期の始まりでは、身体の急激な成長と共に、その身体的な成長に心の成長をどう追いつかせるかが、個人個人で試行錯誤される時期となり、コミュニケーションの様相も異なってくる。

現実検討能力がついてくるにしたがって、今まで疑いなく信頼を寄せていた親や先生・コーチからも心理的な距離を取り、考え方と同じくする者同士の同年代の仲間意識や一体感が急激に高まり、仲間同士で自由さを謳歌しようとする一方、それと同時に捉えがたい現実社会に対するもどかしさや、自分たちの実力はそれほどでもないことも思い至るようになり、それに伴う挫折感や孤独感も高まっていく時期である。そして、この年代以降の子どもたちは、急激に社会の視界が開けていく中で、こうした仲間同士の親密さや自身の孤独を通して、本格的に複雑な大人のコミュニケーションを磨き始める時期にもなっていく。コミュニケーションスキル習得の試練は、そこから始まっているのである。

前述したようなコミュニケーションの段取りやプロセスを思春期の子どもたちの会話にして説明し直すと、例えば朝の登校時に友人を見かけ、「おはよう。今日は暑いね～」と言葉をかけた時、もしその相手から何の返答もこなかったとしたら、どうするだろう。まず、一つの方策は、聞こえなかったのかなと思って更に近寄り、もう少しゆっくりと声掛けをしてみることが考えられる。まだまだ自分中心に考えが回っている時期なので、考え方をしていてうっかり聞き漏らすことはあるものである。それで反応があつて、「ごめん、聞こえなかった。暑いね～」といつもの笑顔の返事があつたとしたらそれでその話は終わりである。だが、「いや別に。今日は暑くないよ」と期待したこととは逆の返事がきたら、またそれはそれで、その先を検討し実行しなければならない。本当に暑くないと思っているのか、それとも相手が自分との会話を続けるのは乗り気ではないので、いつもと異なる返答があったのかと考える。そして、その友人の服装と自分の服装を比べてみて、相手が風邪でも引いているのではないかと推察したり、そうでなければ会話を続けたくないのは悩み事があるからなのか、悩み事なら元気が出るような励ましの声掛けをしてみるのがよいのか、それともそつとしてあげた方がよいのか、また悩み事の原因は何なのか、家族とのけんかなのか、友達

関係なのか、それとも、自分が迷惑をかけたことがあったのか、それが思い当たったとしたら詫びた方がよいだろうなどと、いろいろな捉え方や行動パターンが網の目のように広がっていくのである。つまり前にも述べたように、たくさんの行動パターンの引き出しを持ち、複数の可能性を同時に考え、そこから適切と思われる考え方をひとつ試してみて相手の反応を見ていくようなコミュニケーションスキルが段々と相手から期待され、自分もそうありたいと思う時期なのである。そして、面倒ではあるけれども、省略や逆の丁寧さなど、信頼関係に基づいたコミュニケーションの上級者的なかけあいができるようになるまでは、結構失敗も伴う試行錯誤が続くのである。

そのようにして思春期から培っていった本格的なコミュニケーションスキルは、更にその人の人生にいつも寄り添っていく。高校や大学を卒業して思春期から青年期にさしかかった若者は、大多数がサラリーマンやOLとなって社会に出ていくが、遅刻欠勤なく出社し、与えられた仕事を卒なくこなすことは当たり前のことであり、むしろ上司や同僚、部下と共に協力しながら仕事をしていくことが求められ、それが自分の仕事の成果につながったり、更に仕事に取り組もうとするモチベーションアップにもつながっていく。また、縁あって結婚した後は(言っても、50歳時の未婚割合である生涯未婚率は男女共に近年上昇し続けているが)、妻や夫との配偶者関係はもちろんのこと、更に主には配偶者の父母や配偶者のきょうだい、またきょうだいの配偶者や配偶者のきょうだいの配偶者などとの付き合いが始まる。そして子どもが生まれれば、これから一生の付き合いとなる親子関係が開始される。配偶者と共に協力しながら子育てをすることになるのだが、自分や配偶者のきょうだいにも子どもができれば、おい・姪(義理を含む)ができ、自分はその子どもたちのおじ・おば(義理を含む)となり、子どもたちのいとこ同士の付き合いに、自分たちが関わることにもなる。更には、子どもの学校関係や習い事を通した親同士の付き合いも始まり、また自分の趣味を通した自分独自の付き合いの輪も存続したり、新たに加わったりするだろう。そして、更に年月が過ぎれば、自分たちは子どもの結婚により、義理の父や母の役割を引き受けこととなり、孫が生まれれば祖父母となり、ひ孫が生まれれば曾祖父母となって、さらに入間関係が広がっていく。そのようにして人は、人生の最期まで、様々な人たちに囲まれ、コミュニケーションを持ちながら生涯を終えていく。

## 青年期のコミュニケーションスキルの高まりとアイデンティティーの獲得

このように人の人生は、どの時代にあっても様々な人との関係の中で営まれておる、コミュニケーションが存在し、そのスキルが磨かれていく。そして、前述のように職業人となってチームで仕事をしたり取引先とやり取りを重ねたり、また、結婚して家庭人となって夫婦関係、親子関係、親族関係、近隣関係と人間関係が広まっていく成人期は、社会から求められるコミュニケーションスキルのレベルが格段に上がる時期でもあり、したがって、その直前の青年期においては、コミュニケーションスキルを十分に伸ばしていくことが求められる。

青年期はまた、生涯発達心理学において、過去・現在・未来の自己のイメージを統一したものとして連続して考える「時間的展望」の取得が求められる(白井・都筑・森, 2012)。つまり、自分が、どのようなプロセスを経てどのような人間として育ったのか、そして、現在の自分はどのような特徴を持っているのか、そしてそれは、これから自分の人生で役立つものであるのかを見極めていくことが求められる。いわば青年期は、これまでの人生の仮まとめの時期であり、人は生涯において発達し続けることを提言した前述のエリクソンは、青年期とは、自分が他の何者でもない、これがまさに自分であるという「自我同一性(アイデンティティー)」を獲得する時期であり、一方、自分が持っている特徴は、社会通念や慣習としっかりとすり合わせが行われなければならないとしている。すなわち、自分の特徴は、どのように社会通念と整合するものなのか(そもそも自分は社会通念をしっかりと把握できているのかも含まれるだろう)、整合しないものはそのまま自分の「個性」として取つておけるのか、それとも、何らかの修正や思い切った方向転換が必要なのかななどいろいろ考えを巡らせながら、その場その場の体験の中で自分なりの結論を出しながら、社会と調和した「自分らしさ」に自分を仕上げていくのである。このプロセスを青年心理学では、「役割実験」と言うが、そういった行為は、複数の重要な他者との競争や励まし合い、または見守りの中で、集団社会に生きる成人としての自己を作り上げていく青年期ならではの作業と言うことができるのではないかと思われる。

## コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、英語表現Ⅰ・Ⅱ

I 次の英文を読み、設間に答えなさい。

Although many people think it is a modern phenomenon, distance learning has been around for at least 200 years in one form or another. Historical examples of long-distance learning include students being sent a series of weekly lessons by mail. The technological advances of the past 20 or so years, however, have meant that this form of education is now a credible alternative to face-to-face learning. Indeed, 1996 saw the establishment of the world's first "virtual university"<sup>(1)</sup> in the United States, showing how far distance learning has come in a relatively short space of time. While it is now possible to obtain a large variety of online degrees, which is the best type of education to pursue? A closer examination of this topic reveals that distance and traditional educational instruction have significant differences but also some similarities.

When comparing the two systems, the most obvious difference lies in the way that instruction is delivered. Distance learning is heavily dependent on technology, particularly the Internet. In a face-to-face course, students may only require a computer for the purpose of writing an essay. In comparison, when learning remotely, technology is the principal means of communication. Face-to-face instruction must take place in real time and in one location. Conversely, distance learning can happen at any time and in any location, since the learning is not restricted by geography. The flexibility this provides means<sup>(2)</sup> that students may be better able to learn at their own pace, but it may also mean that learners have to be well organized and self-disciplined. In other words, they must be more highly motivated in order to do well in distance-learning courses. Finally, with face-to-face learning, the teacher and

student have the opportunity to develop a personal relationship. In a virtual classroom, by contrast, the teacher may seldom or never actually meet the student. This may make it hard for teachers to understand their students'  
(3)  
specific learning needs.

Although the nature of the teacher-student relationship may differ in the two methods, they do share the same core principles. Just as a teacher is the “knower” in a classroom, he or she is the one responsible for helping students understand the key sections of an online course. The teacher needs to decide how to best present the material to be learned and in which sequence the topics should be introduced. He or she must also create the assignments for the course and help the students know what resources (textbooks, websites, and so on) will best support their learning. Additionally, a teacher needs to provide student feedback in some way. For example, a language teacher in a classroom may be able to correct a student’s grammar or pronunciation in the moment, whereas a distance-learning teacher may need to provide written or recorded feedback to be delivered later. In any case, all the usual elements of the teacher’s role are necessary, no matter what kind of instruction is being used.

(出典：Alan S. Kennedy et al. *Prism Reading*. 一部改変)

設問 1 下線部(1)を日本語に訳しなさい。

設問 2 下線部(2)を、this の内容も明らかにして、日本語に訳しなさい。

設問 3 下線部(3)を、This の内容も明らかにして、日本語に訳しなさい。

設問 4 下線部(A)について、本文に基づいて日本語で説明しなさい。

## II

次の英文を読み、設問に答えなさい。

Atsuo and \*Yun were overjoyed when their daughter Toshie was born. Right from the start, Yun spoke Korean to Toshie but Japanese to everyone else, since nobody else in Toshie and Yun's environment spoke or even understood Korean. Yun's own parents were deceased and she had no Korean-speaking friends in Japan. For Yun it was a relief to be able to speak her home language again after so many years of just speaking Japanese. It felt very right to speak to Toshie in Korean.

Atsuo had never heard his wife speak Korean until the moment he heard (1) her speak Korean to Toshie. Rationally, he thought it was only right that Yun should speak her own language to her child, but he felt somewhat disconnected when he heard Yun speak to Toshie in a language he did not understand. He shrugged it off and told himself that things would go better once the novelty of it all had worn off.

When she was five months old, Toshie started to cry when Yun switched from speaking Korean to Toshie to speaking Japanese to Atsuo or his live-in parents. It's clear from this (2) that Toshie was able to distinguish very well between Korean and Japanese, and that she had built up the expectation that her mother spoke only in one particular way: Korean.

Of course, it was impossible for Yun to communicate with Atsuo and her in-laws in anything but Japanese, but Toshie's crying did make things quite (3) difficult. Yun tried to see how she could resolve the situation. She did not want to make language into a battleground, and started to try and speak some Japanese to Toshie when Atsuo or her in-laws were within earshot. At first, Toshie got very upset, but Yun persisted. Once Toshie was seven months old, she seemed to have become used to her mother speaking Japanese when other Japanese speakers were in the room, and Korean when they were alone.

When she was a bit older, Toshie loved to play social games like

peek-a-boo, and she was very good at pointing at her nose, ears, mouth and head when so asked. She was able to do all this both with Korean and Japanese words. If Yun inadvertently said a Korean word to Toshie when Japanese speakers were present, Toshie stopped in her tracks, looked at her mother with a quizzical look on her face, and giggled in a sort of embarrassed way. Yun was then quick to correct herself and repeat the word in Japanese, and Toshie seemed pleased with that. Toshie's reaction to Yun saying a  
<sup>(4)</sup>Japanese word to her when they were alone was much more strong, though: Toshie would burst into tears if this happened, and it took Yun a lot of time to try and calm her down. Yun tried to avoid saying anything in Japanese when she was alone with Toshie.

(出典：Annick De Houwer, *An Introduction to Bilingual Development*. 一部  
改变)

(注) Yun ユン(人名)

設問 1 下線部(1)の理由を本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 2 下線部(2)が指している内容を、本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 3 下線部(3)について、Yun はどのようにしてこの問題を解決したのか、  
本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 4 下線部(4)について、比較されているものを明示しながら、日本語に訳し  
なさい。

III 次の英文を読み、設問に答えなさい。

Some of the most important linguistic changes affecting English since the 1960s have arisen from the way society has come to look differently at the practices and consequences of sexism. There is now a widespread awareness,  
(1)  
which was lacking in the early 20th century, of the way in which language implies social attitudes towards men and women. The criticisms have been mainly directed at the biases built into English vocabulary and grammar which reflect a traditionally male-orientated view of the world, and which have been interpreted as reinforcing the low status of women in society.

In vocabulary, attention has been focused on the replacement of 'male' words with a generic meaning by neutral items — *chairman*, for example, becoming *chair* or *chairperson*, or *salesman* becoming *sales assistant*. In certain cases, such as job descriptions, the use of sexually neutral language has become a legal requirement. There is continuing debate between extremists and moderates as to how far such revisions should go — whether they should affect traditional idioms such as *\*man in the street* and *\*Neanderthal Man*, or apply to parts of words where the male meaning of *man* is no longer dominant, such as *manhandle* and *woman*. The vocabulary of marital status has also been affected — notably in the introduction of *Ms* as a neutral alternative to *Miss* or *Mrs*.

In grammar, the focus has been on the lack of a sex-neutral third-person singular pronoun in English — a gap which becomes a problem after sex-neutral nouns (such as *student*) or indefinite pronouns (such as *somebody*). The difficulty can be seen in the following sentence, where the blanks would traditionally be filled by the pronouns *he* or *his*:

If a student loses \_\_\_\_ key, \_\_\_\_ should report the loss to the \*bursar.

To avoid the male bias, various alternatives have been suggested, but all have (B) their critics. *He or she or she or he* is sometimes used, but this is often felt to be stylistically awkward. In writing, forms such as *(s)he* can be convenient, but this device does not help with *his* or *him*. In informal speech, *they* is widespread after such words as *anyone*, but this usage attracts criticism from those who feel that a plural word should not be made to refer back to a singular one. Many writers therefore choose to recast their sentence structure to avoid the problem, for example by turning the singular noun into a plural (*If students lose their key...*). A radical solution, so far unsuccessful, is to invent a completely new pronoun to act as a neutral third person.

(出典：David Crystal, *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*.  
一部改変)

[注] man in the street 普通の人 Neanderthal Man 頭の鈍い人  
bursar 会計係

設問 1 下線部(1)を日本語に訳しなさい。

設問 2 下線部(A)の such revisions が指す内容を日本語で説明しなさい。

設問 3 下線部(B)について、本文で紹介されている解決策の中から具体例とその問題点を 3 つ挙げ、①～③に簡潔に日本語で説明しなさい(順不同)。

IV 次の文章を読み、設問に答えなさい。

タブレットを片付けたり、テレビゲームの電源を切ったりすることについて、これまでに親と話し合ったことはありますか？ Most families are having these battles. In 2018, Brigham Young University and *Deseret News* conducted their American Family Survey. It showed that the Number 1 fear for parents of teenagers was too much technology.

If you're in school now, you may not remember a time before there were smartphones and tablets everywhere. The iPhone was introduced in 2007, and the iPad came out a few years later, in 2010. But screen time is nothing new. 親が子どもだった時、今のあなたと同じくらいテレビを見ていた、 or even more. They probably played video games, too.

Mobile devices are different, though, because they can come with us everywhere we go: to the dinner table, to restaurants, into the car, into the bedroom when we're going to sleep. They are programmed to constantly remind us to pick them up or to keep using them. That's part of what makes smartphones smart! But it also means that they are always interrupting us when we're trying to have family time or fun with friends. And unlike with TV, which people often watch as a family, everyone — including parents — is now distracted by his or her own little machine.

Scientists who study the effects of media say too much screen time can cause problems. More than two hours a day of screen time raises your risk of being overweight. 夜に画面を見すぎることは、健康的な睡眠を妨げます。 Children who grow up with the most screen time (several hours a day) can have a hard time focusing and doing well in school. And many families fight about screen time, which is no fun for anyone.

The solution is to talk about screen time. いつ、どこで、どのようにコンピューターや他の機器を使うつもりであるかを、家族ととり決めておきなさい。 No more than an hour a day is recommended for kids during the school week.

Parents, too, should put down their phones.

When you do use a device, consider enjoying it with your family, perhaps by playing games or watching a movie. The American Academy of Pediatrics calls this “joint media engagement,” and says it’s the best way for kids to grow up healthy in our digital world.

(出典：Anya Kamenetz, “Share the Screen,” *Time for Kids*. 一部改变)

設問 下線部(1)～(4)を英語に訳しなさい。

# 数 学

(数学 I ・ 数学 II ・ 数学 III ・ 数学 A ・ 数学 B)

I

(1) 次の問いに答えなさい。

(i) 5400 の正の約数の個数を求めなさい。

(ii) 5400 の正の約数の総和を求めなさい。

(2)  $\sum_{n=1}^{100} \frac{1}{(3n+2)(3n+5)}$  を計算しなさい。

(3) 次の積分を計算しなさい。

$$(i) \int 2x \log|x+1| dx$$

$$(ii) \int \frac{x}{2\sqrt{x+1}} dx$$

II (1)  $a, b, c$  を正の実数とするとき、次の各不等式が成り立つことを証明しなさい。

$$(i) \quad \frac{b}{a} + \frac{a}{b} \geq 2$$

$$(ii) \quad \left\{ \frac{1}{3} \left( \frac{1}{a} + \frac{1}{b} + \frac{1}{c} \right) \right\}^{-1} \leq \frac{a+b+c}{3}$$

(2) 次の方程式、不等式を解きなさい。

$$(i) \quad \tan^2 x - \sqrt{3} \tan x \leq 0 \quad \left( 0 \leq x < \frac{\pi}{2} \right)$$

$$(ii) \quad 2\sqrt{3} \sin x \cos x + 2 \cos^2 x = \sqrt{3} + 1 \quad (0 \leq x < 2\pi)$$

III

(1) 次の問いに答えなさい。

(i) 次の式を簡単にしなさい。

$$(\log_3 2 + 1) \log_6 3 \sqrt{3}$$

(ii) 次の方程式を解きなさい。

$$2 \log_2(x - 5) = 3 \log_8(x - 3)$$

(2) 次の問いに答えなさい。

(i) OLYMPIC という単語の 7 文字のアルファベットすべてを使ってできる文字列の総数を求めなさい。

(ii) (i)のすべての文字列を辞書式に並べたとき、OLYMPIC は何番目になるか求めなさい。

IV

平行四辺形 OACB が、条件  $OA = BC = 4$ ， $OB = AC = 3$  を満たしながら動く。 $\angle AOB = \theta$  とおくとき、次の問いに答えなさい。

(1) B を通り OC に垂直な直線と OC またはその延長との交点を P とする。実数  $x$  を用いて  $\overrightarrow{OP} = x\overrightarrow{OC}$  と表すとき、 $\cos \theta$  の値を  $x$  を用いて表しなさい。

(2)  $\theta$  が  $0 < \theta < \pi$  を動くとき、 $x$  の取りうる値の範囲を求めなさい。

（

V

$k$  は 0 以上の実数とする。関数  $f(x) = x^3 - 6x^2 + 9x - k$  について次の問いに答えなさい。

(1)  $f(x) = 0$  が実数解を 1 つのみもつような  $k$  の値の範囲を求めなさい。

(2)  $k$  の値が(1)で求めた範囲であるとき,  $f(x) = 0$  の実数解を  $r$ , 残りの複素数解を  $\alpha, \beta$  とする。

(i)  $\alpha + \beta$  と  $\alpha\beta$  を  $r$  の式で表しなさい。

(ii) 複素数  $\alpha, \beta$  を 2 つの解とする二次方程式を求めなさい。

(3) 複素数平面上の 3 点  $r, \alpha, \beta$  を頂点とする三角形の面積が 18 であるとき,  $r$  の値及び  $k$  の値を求めなさい。

一 A「人主之勢、天下無能敵者」を現代語訳しなさい。また、この文中の「敵」と最も近い意味で使われている「敵」を含む熟語を次から一つ選びなさい。

- ① 政 敵    ② 敵愾心    ③ 朝 敵    ④ 敵 意    ⑤ 四 敵    ⑥ 油斷大敵

二 B「必思有大於此者把攬之」を「必ず此れより大なる者有るを思ひて之を把攬せば」と読めるように返り点を施しなさい。

三 C「安可絶也」をすべて平仮名で書き下しなさい。

四 この文章では何がD「毒薬」に喻えられて論じられているのか、七十字程度(句読点を含む)で具体的に説明しなさい。

五 本文最後の   部分に最もふさわしい文を次から一つ選びなさい。

- ① 人誤食レ之死矣    ② 医選与レ之生矣    ③ 人恐不レ食レ之生矣  
 ④ 医誤与レ之死矣    ⑤ 人選食レ之生矣    ⑥ 医恐不レ与レ之死矣

弁ジテレ之ヲ曰ハバレ此チ乃チ禍スル天ト下ヲ後ヲ世ト之ト言モ雖モ聞クト之ヲ不ル可カラレ從フ也。譬たとフレバレバ如シ下ト毒毒藥ハ  
不ルモ可カラレ絕ツ、而ト神注(8)農ト與ハ歷ノ代ノ名ヒテ醫ト言ク之ヲ曰ク此レ乃チ毒ナリ藥。如シ何シ形ハ色ハ食ハバ之ヲ  
必ズ殺スト人ヲ。故ニ後人見チ而リ識リ之ヲ、必ズ不ルガ食ハ也。今チ乃チ絕レバ之ヲ不レバ以テ告ゲ人ヲ、既ニ不シテ

能ハ絶ツ、而□。

(『宋名臣言行錄』による)

\* 設問の都合上、一部訓点を省き文字を変更した箇所がある。

注 (1) 同朝——朝廷の同僚。

(2) 上——ここでは、天子のこと。

(3) 祖宗——歴代の君主。

(4) 趙氏——宋王朝のこと。

(5) 過舉——過失の行為。

(6) 回——ここでは、方向を変えさせること。

(7) 把攬——引きとどめること。

(8) 神農——古代の伝説的帝王で、医薬の神ともされる。

次の文章は、「先生」(劉安世)と「僕」(馬永卿)とが「金陵」(王安石)の発言について、「老先生」(司馬光)の見解を引用しつつ議論している場面である。

先生曰、金陵有三不足之說。聞之乎。僕曰、未ダ聞。

トレカト

先生曰、金陵用事同朝起而攻之。金陵關衆論進言於上注(2)曰、天變、不レ足ラ懼ラ、祖宗、不レ足ラ法ラ、人言、不レ足ラトララ、此三句、非ス独リ為ル趙氏禍、乃チ為ル万世禍也。

老先生嘗云、人主之勢、天下無能敵者。或有過注(5)舉。人臣欲

回注(6)之、必思有大於此者。把攬之、庶チ幾可ラ回ラ也。今乃教人主、使下

不レ畏天レ、不レ法祖宗、不チラ人言ヲ、則何等事不レ可ラ為ス也。

僕曰、此言為ル三万世禍。或有レ術以禁シ絕其說、使不レ傳於後世乎。

先生曰、安可絕也。此言一出、天下人莫レ不レ聞ラ之。若著論、明ラ。

一 波線部①～⑤のうち、品詞の異なるものを一つ選びなさい。

二 Aについて、「この女御」が誰かを明らかにして、現代語訳しなさい。

三 Bについて、現代語訳しなさい。

四 Cについて、なぜ女房はこのような言動をとったのか、説明しなさい。

五 Dについて、なぜこのように考えたのか、説明しなさい。

六 Eについて、どのように決着したのか、理由を添えて説明しなさい。

七 この文章は『大鏡』の一節である。『大鏡』と同じジャンルに属するものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

① 『伊勢物語』

② 『采花物語』

③ 『平家物語』

④ 『宇津保物語』

⑤ 『堤中納言物語』

〔1〕

次の文章は、摂関家藤原氏内部の外戚関係にもとづく権力をめぐる諍いが描かれている場面である。

この大納言殿(注1)、無心のこと一度ぞのたまへるや。御妹の四条の宮の后にたちたまひて、初めて入内(注2)したまふに、洞院のぼりにおはしませば(注3)、東三条の前をわたらせたまふに、(注4)大入道殿も、故女院(注5)も胸痛く思し召しけるに、(注6)按察大納言は后の御せうとにて、御心地のよく思されけるままに、御馬をひかへて、「この女御は、いつか后にはたちたまふらむ」と、うち見入れてのたまへりけるを、B殿をはじめたてまつりて、その御族やすからず思しけれど、男宮おはしませば、たけくぞ。よその人人も、「益なくものたまふかな」と聞きたまふ。(注6)一条院、位につきたまへば、(注7)女御、后にたちたまひて入内したまふに、大納言殿の、亮(注8)に仕まつりたまへるに、出車より扇をさし出して、「やや、もの申さむ」と、女房の聞えければ、「何事にか」とて、うち寄りたまへるに、進の内侍、顔をさし出でて、「御妹の素腹(注9)の后は、いづくにかおはする」と聞えかけたりけるに、「先年のことを思ひおかれたるなり。みづからだにいかがとおぼえつることなれば、道理なり。なくなりぬる身にこそとこそおぼえしか」とこそそのたまひけれ。されど、人がらしよろづによくなりたまひぬれば、ことにふれて捨てられたまはず、かの内侍のとがなるにてやみにき。

(『大鏡』による)

- 注(1) 大納言殿——藤原公任。 (2) 四条の宮——藤原頼忠の娘。遵子。円融天皇の中宮。
- (3) 東三条——藤原兼家の邸宅。 (4) 大入道殿——藤原兼家。
- (5) 故女院——藤原兼家の娘。詮子。円融天皇の女御。 (6) 一条院——一条天皇。
- (7) 女御、後にたちたまひて——一条天皇の母である詮子が皇太后におたちになつて。
- (8) 進の内侍——女房の呼び名。 (9) 素腹——子を産まない女。

七 この文章の説明として適切でないものを、次の選択肢の中から一つ選びなさい。

- ① 「私」と夫との独特なやりとりの会話文を多用し、非対称な夫婦の関係が具体的に描かれている。
- ② 「私」の心情を主としながら、それに対する夫の反応や返答の理由も「私」が察する形で示されている。
- ③ 妻の看護が日常のほとんどを占め、彼女に逆らわない気弱な夫の姿が「私」の視点から示されている。
- ④ 終わりが見えず、金銭的不安も抱える療養生活が、比喩的言いまわしを多用しながら描かれている。
- ⑤ 夫婦の穏やかな療養生活を基調としつつも、看病人たちとの緊迫した人間関係が描かれている。

う建前から、私に肉をたべさせるとときには自分も肉をたべ、私が卵をたべる数に近く卵をたべて、私の家に来たときの蒼黒い皮膚の下から、磨き出したような白い艶のある肌を見せるようになつていた。彼女のこうしたやり方にも縁辺の遠慮もあつて、「少し金がかかりすぎるね」位しか言えない夫だったが、その滑稽な生花を見ても、

F 「三本の生花つておかしいって病人が言つてゐるぜ」としかやつぱり言えないのだった。

(平林たい子『私は生きる』による)

注(1) フランダース戦——第一次世界大戦の西部戦線における主要な戦いの一つ。

(2) 保険で出て来た——夫は関東大震災後に検挙されていた。

一 Aについて、「私」のどのような感覚を表しているか、答えなさい。

二 Bについて、なぜこのような言葉を発したのか、その理由を説明しなさい。

三 Cについて、これは「私」のどういうあり方を指しているのか、引き合いに出されている「医者」「地質学者」のあり方と対比しながら説明しなさい。

四 Dについて、「この言葉」はどのような「力をもつてゐる」のか、「足を掬う」という語の意味を明確にしながら説明しなさい。

五 Eについて、「私」は「おとめさん」をどうしようとしているのか、説明しなさい。

六 Fについて、このようにしか「やっぱり言えな」かつた夫の状況を説明しなさい。

と言ひ出した。

「ちえ、神経だよ。だけど病人に逆つても仕方がないからあけよう。寒いなあ」

結局窓をあけることになるのだった。私はまるで、既に病氣の力で征服しつくした夫までを病氣の手下にして新たに来たおとめさんを料理してかかろうとしているかのようだつた。

實際、夫はどんなに私の病氣のためにスパイルされていたか、たとえば私の枕元には小さい錆びた呼鈴を置いて階下までとどかない呼声の代りにしていたが、それのチンチンとなる音は私の呼んでいる肉声以上の中声として夫の神経にはとくべつ反応するような習慣になつてしまつていた。夫は道を歩いていても、それと似た音がするとビクッとした。あるとき、交叉点を渡る途中で信号柱の上からこの音がけたましくひびいた。何か考えていた夫ははつと立ち止まつて、交通巡査から思い切りどなりつけられたのだった。

それにそもそも夫は人の雇主というものにはなり慣れないぎこちなさで、人が変つたかと思われるほど、雇つた人には弱気に対する人だつた。

注(2) 保釀で出て来たばかりの頃ある日桃色ダリアを三本買つてきて私の枕元にさした。すると、そのときの看病人だつた夫の身寄りの娘が、

「あら、きれいな花だこと。私もほしいわ」

と言ひはじめた。私と夫がいぶかしく見ている前で彼女は別な花罐に水を汲んで来て、そのダリア一本だけをとつて自分の机に挿した。その花罐のおかしさを見てから私の花壇を見ると残りの二本で何とも恰好のつけようなくそれぞれの方角へ勝手勝手に傾いでいるのだった。

「一本の生花つてあるかしら」

という言葉は微妙でも気持の中では握りこぶしに力を入れて、立てない足で地団太をふんでいたのは当然だつた。彼女は、その前から、平等主義をどう取りちがえたか、この家ではそれが許されるという顔で病人一人が贅沢をするのは不公平だとい

「俺は物好にこんなことをしているんじやないぞ。一体、どういう気持ならそういうことが言えるんだ。お前はそんなことをいうとき、俺に気の毒だという気持は起らないのか」

「起らないわ……」

私は例によつて細い消え入るような声で、しかしそうかりと答えた。

「起らないって！ それは何故だ

夫は呆れて私の方を見やつた。

「貴方には氣の毒だけれどもね、人は病氣にかかるたら直す権利があるんだわ。仕方ないわ……」

D 涙はこの言葉の伴奏としてばらばらと落葉のように落ち散つた。所がまたこの言葉は一掬いで夫の足を掬う力をもつてゐるのだから、夫はますます驚いて私の顔を見直したもののかの正面切つた大義名分の理念に一と打ち打ちのめされたらしく気を取り直して更に暗くする工夫をしてから、時計やが時計の部分を照らすような狭いあかりの中でジイジイとペンを走らせるのであつた。

こういう私のそばから看病人は幾人も暇をとつて出て行つた。しかし私は二人きりになるのを喜ぶだけで、そのほかには何の思慮もなかつた。

そういう所へ、何人目かにおとめさんが現れたのであつた。

それは寒い真冬だつた。私の室はとなりの室との境の襖を外して尚窓は深夜でもあけ放してあつた。二人は火鉢を間に置いて一人は継ぎ物をし一人はベンを走らせた。時々手をあぶつたり手を吹いたりしてかじかむのを温めるのであつた。見れば、私の含嗽罐に細い針のような冰さえちらちら見える寒さだつた。

「寒いね。これじゃ壠<sup>ハシマ</sup>らない。しめようや」

と二人は話し合つて窓をしめたが、じき私は、

「息苦しい」

「ドイツは近日英本土上陸をしますよ」

と言つた言葉一つだけを覚えていて、とんでもない頃、

「もうロンドンは占領されましたか」

とたずねたほど超然としているのであつた。またある地質学者が癌で入院した帝大病院で残りの著述を口述したという話をある人が話したとき、私は病呆けた部分と、呆け残った正気の部分とをあげてせせら笑つた。

「私は病氣三昧でいいのよ。この中に詩もあるし、生活も理想も創造もあるのよ」

それは、看病と生活でひしがれて、少しでも私が身をかがめ起すのを心待ちしている夫の希望を足でにじつて土にこすりつけるような言葉だつた。そういう言葉の裏ではアイスクリームをせがんで東京のさかり場というさかり場を夫にたずね歩かせたり夜なかに起して湯たんぽをわかさせたり脈を見させたりする私の気隨気ままに正しい席が用意されているのであつた。

夫が会社を馘になつて家で机仕事をするようになつてから、私はたびたびこういうことも言うようになつていた。

「ねえ、お願ひ、灯を暗くして——」

夫は電気スタンドをふろしきで掩つて、その下で貞を繰つた。しかしそれでも淡いあかりは低い天井ややけた畳の目をほのぼのと照らした。

「ねえお願ひ、もつと暗くして」

という私の心臓は光さえ見ればやたらに駆け出す野馬のようで手におえなかつた。

「そんなに暗くしたら、字はかけないじゃないか！ これが飯の種なんだぞ」

とどうとう夫は憤り出した。しかし暗くするだけならまだしもだつた。ときどき私は動く人間というものを神経に支え切れなくなつて、

「ねえお願ひ、三十分ばかり外に出ていてくれない」と言いはじめた。

国語総合・現代文B・古典B

I  
「暑寒い！」

とときどき私は訴えるような傲岸こうがんで孤独なむずかしい病人と變っていた。

「わからんことを言うじゃないか。何をどうしてくれというんだい」

A と夫は私のそういう神經を叱りながらも暑い寒さ、寒い暑さ、と心の中でその感覺を反覆はんぱくしてみて何とかその入り込んだ感覺を理解しようとしているのが見えた。

夏真昼私はびつしより汗をかきながら、

「窓をしめて下さいよ。ねえお願ひだわ。窓をしめて——」

と繰返しているのであつた。

「暑さの中には寒さがあるわ。暑ければ暑いほど寒いじゃないの。そんなことがわからないのかしら」

と私は自分の感覺をどこまでも主張しようとしているのであつた。

夫は仕方なしに毛の生えた腕をぬらして汗をポトポト落としながらときどき手拭で拭いて、しめた窓のそばで辞典を繰るのだった。

B  
「ああ無念無想！」

と私はいくども自分に命令して天井の穴はる紙や障子の檻はんの折れはみないようになした。行つても行つても芸術の道が遠かつたように、病氣の道も究めれば究めるほど遠いのであつた。私は、生と死の二色を旗印にこの孤独な道を一人堂々と進んでいつの間にか病氣の英雄になつてゐるのであつた。

私の視野からは人生も社会も散大して消えていた。ドイツ臘膚ブリキの医者がフランダース戦のころ、